

7月20日 蝉とウナギ

蝉の声を聞くと、夏本番という気分になる。しかし、私の子どもの頃と比べると、少々鳴き声が騒がしい。

かつてこのあたりの蝉と言えば、ミンミンゼミやアブラゼミが主流だったが、今鳴いているのはほとんどがクマゼミである。暑さに強いクマゼミが分布域を北上させている理由の一つに温暖化が挙げられているが、森林や緑地の減少も影響していると言われている。

蝉の寿命は2週間ほど。子孫を残すために必死に鳴いていると考ええると愛おしくもなるが、それは成虫の話。幼虫は土の中で7年近く過ごすという。おまけに蝉はカメムシの仲間。少し嫌いになった。

実はこれほどポピュラーな虫であるにもかかわらず、研究がほとんど進んでいない。先ほど寿命の話をしたが、これも俗説に過ぎない。

同様に、身近であるのに謎だらけの生き物がある。ウナギである。この時期スーパーで大量に売られているが、その99%が養殖だという。河口に上ってくるシラスウナギ(ウナギの稚魚)を捕獲して養殖するのだが、そのシラスウナギがどこから日本にやってくるのか解明されていなかった。先日、理科のA先生がふらりと校長室を訪れて、ウナギの不思議を熱弁して帰って行った。どうやらウナギに壮大なロマンを感じているらしい。

今から十年ほど前、日本の調査団が、日本から2500km以上も離れたマリアナ海嶺を、日本ウナギの産卵場所として特定した。しかし、種を残すためとはいえ、2500kmもの距離を苦勞して旅する理由は何であろう。おまけに日本に戻るのは稚魚だ。途中捕食されるリスクも高い。それが成長して日本各地の沼や川に生息している……。不思議だと思いませんか……。これが熱弁の概要である。

そういえば数年前、A先生から写メが送られてきたことがあった。薄いエメラルドグリーンの羽根。その汚れない美しさ……。蝉の羽化の写真であった。それはいいのだが、なんの前置きもない。送られてきた写真に私が首をかしげていると、隣で妻が「なんかあったんかな」とつぶやいた。蝉やウナギに負けず劣らず、不思議な先生である。

7月21日は土用の丑の日。壮大な謎を頭に浮かべながら、蝉の声(最近夜でも鳴いている)をバックに、ほくほくの蒲焼きに舌鼓、といきたいものだ。

